



福島を訪れて

大阪の地で福島と繋がるとは何か？

南労会支部 H

今年一月末に、以前から行きたいと思っていた福島を初めて訪問することができました。

■生活の場に空港が侵入

二八日の深夜大阪を出发して、二九日の朝、福島へ行く前にこれもまた初めて訪れた場所があります。三里塚（成田）です。今回私は、三里塚の野菜を毎月福島へ届ける活動をしておられる、Fさんの車に同乗させて頂きました。Fさんの福島の訪問は今回で四四回目、

また、Fさんと交代で車を運転してくださったTさんも、そのうちのほとんどを同行しておられるそうです。

三里塚ではまず萩原富夫さんのお宅を訪ね、野菜を受け取り車に積み込みました。キュッと巻きの良い白菜が二玉ずつきっちり新聞紙で包まれ、紐でくくられて、たくさん積み上げられている様子は、美しいものでした。他にも人参、丸大根、牛蒡と、車の中は、野菜で一杯になりました。

そして、ちょうど畑で切干大根を作っておられた市東孝雄さんにお会いし挨拶した後、やぐらに登らせて頂きました。私たちがそこにいた短い時間にも、目の前を、数機の飛行機が大きな音を立てて着陸してきました。

農地や宅地の間に飛行場の滑走路、誘導路が入り組むように伸び、まさに生活の場に空港が侵入しているとしか言いようのない、やぐらから見た光景に強い衝撃を受けました。

■仮設住宅に無農薬野菜を

福島に入ってから、面積にして大阪府の七倍に及ぶ福島県のあちらこちらを訪問するので、その移動距離はかなりのものです。最初に訪れたのは福島市松川、次には県北部の桑折町へ。仮設住宅の集会所の玄関へ野菜を降ろし短い挨拶を交わすと、またすぐに次の目的地へ出発するという慌ただしい訪問なのですが、お互い顔を見て通じ合われている様子に、Fさんが続けておられる地道な活動の積み重ねにより築かれた繋がりを感ずりました。

■言葉で言い表せない思
い抱え

日もとっぴり暮れた頃、再び松川の仮設住宅へ戻りました。以前、大阪での集会に来てお話し下さった、高橋正人さんご夫妻のお部屋を訪ねました。すると、そこで待っておられた住民の女性と皆で、このたび仮設を出て近くに家を建てられたご夫妻の家へ行こうと言われ、新居を訪問しました。

おでん、猪鼻（コウタケ）ご飯、ぼた餅……、三人の女性たちが、それぞれに美味しい手料理を用意して下さっていました。三世帯五名の方たちは、飯館村長泥の住民で

す。長年生活してきた地域が帰還困難区域になったという悲しみ、怒り、悔しさ、何とも表しがたい思いを抱えておられるであろう中で、共に酒を飲み、朗らかに笑いあう人たち。仮設にいても新居を構えても、住民同士がしっかりと繋がって生きておられる、力強さを感じました。

■飯館村の特養

三〇日は、朝から雪が降る中を二本松市の仮設住宅に野菜を届けた後、飯館村の特別養護老人ホーム「いいいたてホーム」に向かいました。道中、雪の中での除染作業を目に

しました。また道沿いには、除染した表土を詰めたフレコンバッグが何段にも積み重ねられている。「仮置き場」もありました。ホームに到着し、野菜を降ろした後、事務職員の方が施設内を案内して下さいました。

最初は三〇名ほどの規模でスタートした「いいいたてホーム」は、徐々に増床し、二〇一一年度からは一三〇名規模で運営するはずだった矢先に原発事故が起こり、現在は四〇名の利用者がここで暮らしておられるのと。ツーフロア（一つは認知症対応型）あったデ

閉鎖しているそうです。この地は居住制限区域となっており、職員も区域外から通勤する／線量計を持ち自己管理する／車で通勤する（自転車やバイクはダメ）という制約もあって、だいぶ減り、現在は約四〇人。

今は使われていない居室や食堂、ディフロアを見たときには、本当に原発事故さえなければ、自然豊かで温かくゆったりとしたこの施設に、利用者さん達の笑顔があふれていただろうにと、胸が一杯になりました。しかし同時に、避難するということにおいても「弱者」である高齢者の生活を、

さまざまな困難の中で支えている、このホームの存在の大きさを感じました。

■殺処分拒否し三百頭の牛とともに

午後には、浪江町の「希望の牧場・ふくしま」を訪問しました。福島第一原発から一四キロのこの牧場で、吉沢正巳さんは国の家畜全頭殺処分を拒否して三百頭の牛たちを飼い続けておられます。すでに肉牛としての商品価値はない牛たちを、「放射能被曝の証拠」として寿命まで生かし続けるのだと話されました。

殺処分に同意した酪農

家からは「自分たちは涙をのんで命令に従ったのに、何で飼育しているんだ」と抗議もあったそうです。しかし、「彼らを否定はしない、彼らは彼らで正しいんだ」と吉沢さんは言われました。避難についても、「逃げた方がいい、そんなことは誰でも分かっている」と。第三者にその善し悪しを理屈で云々することなどできない、当事者の抱える複雑な心情が思われま

後ほどなく東電本店、農林水産省、原子力保安院へ乗り込み、事故に抗議し賠償と牛たちの保護を訴えられました。その後も牧場での牛の世話の傍ら、たびたび東京、また全国各地へと宣伝カーを走らせ、渋谷・ハチ公前での街頭情宣は百回を超えたとのこと。吉沢さんの凄まじい行動力は、すでに「決死救命」という言葉を体現していると思えます。しかしそこにとどまらず、

牧場から福島第一原発三号機の二度の爆発音を聞き、自衛隊の放水作業に伴う白い噴煙を見たと

いう吉沢さん。原発事故

大阪でももっと行動できるはず」と私を揺さぶりました。

■葛尾で牛飼う日、ふたたび

この日はこの後、三春町を訪問する予定でしたが大雪のため断念。急ぎよ、希望の牧場を一緒に訪問したいわき市の友人宅に身を寄せました。福島第一原発のすぐ傍を通る国道六号線を南下し、いわき市へ向かう道中、夜遅く暗い中でしたがさまざまな光景を目にしました。壁を津波にさらわれたまま、大きなショーウインドウが割れたままの建物、入口が封鎖されたまま営

業されていない大型店舗、バリケード封鎖され立ち入りが禁止されている家屋、津波被害による遺体安置所になっていたという温泉施設、人影のない街に残る原発推進の看板、労働者を原発へ運ぶバス……。四年近くの時間が、ここに重く漂っているように感じました。

三十一日、三春町の仮設住宅を訪ねました。集会所に野菜を降ろすと、葛尾村議会元議長の松本政雄さんのお宅へお邪魔しました。温かい味噌汁、煮物、お豆腐など、お連れ合いの風ご飯をご馳走になりました。松本さん

は、「葛尾村へ帰ったらまた牛を飼いたい。種牛は他所へ預けてある」と目を輝かせて話されました。お話から、牛への深い愛情がうかがわれました。

■原発事故で失ったもの
の大きさ

夕方、田村市の仮設住宅へ。仮設の自治会の役員等、男女六名の方が、迎えてくださいました。とっておきのお酒と猪鼻ご飯、イカと人參の煮物、黒豆などをよばれながら交流しました。「仮設から追い出すことはないと言っているけど本当に大丈夫だろうか」など、こ

の先への不安を抱える中にも、住民の結束は固く、「自治会の役員選挙が終わったら花見をしよう」と元気な提案がなされていました。皆さんに見送られて、帰途に着きました。

福島に生きる人たちの出会いの中で、強く印象に残ったことは、農民にとつてその地の土を耕すこと、酪農家にとつて牛と生きること、その思いの深さです。それは、国が福島に対して「安全キャンペーン」を張り、帰還促進を図る中で語る「郷土愛」などは、全く別次元のものです。そ

の思いに触れてなお一層、原発事故が奪ったものの大きさを知りました。東日本大震災そして原発事故からもうすぐ四年という今、大阪の地で福島と繋がることは何かを確かめつつ、日々歩んでいきたいと思えます。

笑顔あふれる港へ！ 港区をなくさない集会

- 日時 3月25日 (水) 18:30～
- 場所 港区民センター大ホール
- 弁士 えがわひろし
おくの正美
辻元清美 (予定)